

## 【別紙2】

### 審査の結果の要旨

氏名：李 昊

本論文は、中国共産党の党内派閥に焦点を定めた現代中国政治研究である。ジャーナリズムでは明瞭な概念の定義のないまま、中国政治を派閥間抗争として捉える傾向があるのは周知のことだ。だが、政治抗争が激しく展開された文化大革命の時代に、コロンビア大学のアンドリュー・ネイサンとシカゴ大学のタン・ツォウとの間で派閥の在り方に関する論戦が交わされるなど、現代中国の派閥を学術的に捉える試みがなかったわけではない。しかし、ポスト毛沢東の時代になると、国家幹部の任期制や党幹部の年齢制限の導入など中国政治の制度化が進み、スタンフォード大学のアリス・ミラーのように、中国政治を理解する上で派閥はもはや重要ではなくなったと断言する研究者さえ現れた。こうした研究状況を背景に、本論文は派閥を中国政治分析の中心へと引き戻す。政策集団とも利益集団とも異なる派閥とは何か、他国の例を参照しつつ、現代中国の文脈に即して明確な定義を施した上で、本人－代理人関係や連合理論などから得られた知見を援用し、派閥の栄枯盛衰を分析するために独自の枠組みを構築する。その上で希少な資料を蒐集、分析し、文革期のいわゆる林彪集団から今日の上海閥にいたるまで、長期にわたって展開されてきた中国の政治抗争を解き明かそうとする本論文は、世界の現代中国政治研究に貢献する労作だと言える。

以下、論文の要旨を述べる。

本論文は、序論に当たる第一章に続き、まず第二章において近代以降の中国における派閥について紹介する。それに続き、1960年代に始まったプロレタリアート文化大革命以降、今日に至るまでに現れた代表的な四つの派閥の栄枯盛衰を分析する事例研究が四章にわたって展開される。そして最終章において、事例研究を通して得られた知見を総合する結論が提示される。

第一章では、先行研究を振り返り、現代中国政治研究において派閥が軽視されるようになった現状を明らかにした上で、本論文の理論的な枠組みを構築する。すなわち、現代中国の派閥を、政策集団でも利益集団でもなく、何らかの縁故を紐帯として、領袖と一定数の追従者との間で持続的な協力関係が構築される小集団として本論文は定義する。公式の組織ではない上に縁故に基づく人脈は方々に伸びるため、その境界が曖昧である一方、レーニン主義の組織原則からは厳禁されるという中国の派閥の在り方が提示される。そして派閥内部の権力関係と派閥間の連携のダイナミズムを、それぞれ本人－代理人関係と連合理論を用いて中国政治を比較可能な形で説明する。時代の推移に関わらず一党支配体制を貫いてき

た中国でも広い意味での政治制度は変容してきた。制度の変容と連動し、また領袖の個性からも影響を受けつつ派閥の在り方は変化し、多様である。こうして権力基盤として重要な役割を果たす派閥は政争とともに栄枯盛衰のパターンを示し、それが中国政治のダイナミズムを構成することが紹介される。

第二章は、現代中国の派閥について次章以降で論じるための導入として、歴史上の中国の派閥について説明している。中華民国が成立してから、いわゆる軍閥間の抗争は第一章で論じられたようなメカニズムに沿って展開された。各派閥は領袖を中核とした個人的な紐帯に基づいて形成されたが、その紐帯のかすがいいになったのは、利益と忠誠の交換関係であった。北伐に乗り出して以降の中国国民党（国民党）はレーニン主義の組織原理を受け入れた革命政党であったにもかかわらず、内部では派閥が抗争を繰り返した。これに対し、中国共産党では、派閥の活動を規定する最重要要因はレーニン主義の組織原理であった。党員の来歴は様々であり派閥の存在空間は大きかったものの、国民党と異なり派閥抗争によって党が分裂することはなかったのである。

第三章からは、各時代を代表する派閥を対象とする事例研究となる。まず俎上に載せられたのは文化大革命の頃の「林彪集団」である。当時、毛沢東は独裁的な権力を揮っており、本章の分析は個人独裁下における独裁政党内派閥の事例研究としてユニークな貢献をなしている。林彪は、毛沢東の追随者として台頭し、文革の混乱の中で地位を保全し軍を安定させるために自分の古い部下たちを抜擢した。しかし、軍をはじめとする政治エリートたちの間で幅広く声望を得たことは毛沢東の不安を掻き立てた。そして江青ら文革推進勢力との権力闘争において毛沢東の支持を失い、林彪集団は批判を受ける対象となり、最後は林彪が中国から逃亡中に墜落死して派閥は崩壊した。

第四章で扱われたのは、文化大革命直後の石油閥の興隆と衰退である。石油部門出身者から成る石油閥は、先行研究ではもっぱら官僚政治の文脈で語られてきた。だが、派閥研究の枠組みで分析することにより、余秋里という領袖に率いられた石油閥の盛衰と政争の連動の側面が解き明かされる。大慶油田の開発成功は、それに携わった石油関係者の間に強い紐帯をもたらし、開発を率いた余秋里は毛沢東に目を掛けられ、マクロ経済運営を任されるようになった。また、彼の部下たちも他の重要部門で責任者の地位を占めるようになった。毛沢東の死後も、石油閥は華国鋒によって重用され、絶頂期を迎えた。だが、大規模な重化学工業開発計画が陳雲による批判を受けて頓挫し、石油掘削船の沈没事件が起きると、権力基盤の弱い石油閥は次第に勢力を衰退させた。

第五章では、陳雲を領袖とする経済保守派が取り上げられる。経済保守派は伝統的な社会主義イデオロギーを信奉し、計画経済の維持とマクロ経済の均衡を重視した政策を掲げる派閥であった。ベースとなる人脈は、計画経済を担う政府部門で形成された。陳雲と派閥的紐帯を有したのは李先念、姚依林、李鵬、宋平らだが、政策の実現に協力する派閥外の有力者との連携も時に行われた。1980年代、陳雲は鄧小平と並ぶ威信を誇った。市場化や経済の対外開放をめぐる経済保守派は改革論者と激しい綱引きを展開したが、1988年の価格改

革の失敗と翌年の「天安門事件」の勃発により絶頂期を迎える。ところが、1992年初めに鄧小平が南方談話を発し、改革と成長の加速を訴えると、多くの地方に加えて江沢民総書記もそれに同調し、それとともに経済保守派は勢力を失い、陳雲らの死去と共にその役割を終えた。

第六章は江沢民を領袖とする上海閥の盛衰を分析する。いわゆる天安門事件後に総書記の座に就いた江沢民が、前任地の上海から多くの追従者を北京に呼び寄せ、要職に就け始めたのは経済保守派の退潮の後のことである。江沢民は、かつて第一機械工業部勤務時代に培われた人脈をも駆使する一方、中央軍事委員会主席として手ずから將軍たちを任命し、次第に上海閥は一大勢力となった。次の総書記の胡錦濤は、出身母体の共產主義青年団の人脈を権力基盤としてこの上海閥とせめぎ合ったが、政権内に多くの追従者を残した江沢民の影響力は強かった。だが、次の総書記を上海閥から出すことは出来ず、習近平は胡錦濤の暗黙の支持を受け、また反腐敗闘争を強力に推進して他派閥を抑えつける一方で、自らの追従者たちを要職に取り立てた。江沢民の老衰と習近平の権力集中により、上海閥は衰退した。

終章は結論として、昇進を果たした領袖が追従者を取り立て、他派閥と連合を組むことなどにより勢力を拡大した後、政敵から受ける攻撃やその老衰などにより派閥を衰退させていくサイクルは一般的なものであり、中国共産党の党内抗争についても同様のパターンが見出せることを指摘する。一つ一つの派閥の個性は異なるし、時代によってそのあり様は変容する上、そもそもレーニン主義の組織原則に照らせば派閥は厳禁である。だが中国共産党の党内派閥は、政策論争を伴う権力闘争を戦う上での権力基盤として往々にして重要な役割を現実に果たしてきた、と実証研究を通して主張される。

以下、本論文の評価に入る。

第一に、研究史の文脈で言えば、本論文は「派閥離れ」が顕著であった現代中国政治研究の最近の傾向に重要な一石を投じた。近年の中国において政治の制度化が進んできたのは事実であるが、制度化と派閥抗争は矛盾するものではなく、個人独裁の時代から今日まで、権力基盤として派閥が重要な役割を一貫して果たしてきたことを学術的に示した点で、本研究は大きな功績を上げた。

第二に、派閥概念を整理した上で、政治学研究の蓄積から知見を援用しながら、現代中国政治のダイナミズムの分析に適用可能な枠組みを構築した理論的貢献も高く評価される。領袖と追従者の間で本人—代理人関係が双方向に働くという洞察や、通常は政党の合従連衡に適用される連合理論の派閥間関係への応用、また派閥の興隆と衰亡を通して中国政治の展開を動態的に読み解く手法などはユニークであると同時に好い意味で野心的であり、他国の政治研究にも豊富な示唆を与える貢献として評価できる。

第三に、中国共産党という秘密主義の革命政党に関する研究は、学術研究に使用可能な資料が限定されるという高い壁におしなべて行く手を阻まれる。だが本研究は、中国の内外で

公刊されたアクセスしうる限りの史料に当たり、これまで明らかにされてこなかった事実を掘り起こして、多くの派閥の形成と抗争に関する深い実証研究を行った。一部の解釈に議論の余地がないわけではないが、公式史観とは異なる分析を、長期にわたり一貫性をもって忍耐強く行ったことにより得られた知見は、今後の研究が避けては通れないものだと評価できる。

第四に、テーマからすると専門外の者には難解な論文かと思われるかもしれないが、実は平明な達意の文章で書かれており、中国政治に馴染みがない者にとっても読み易く、論旨は明快である。その上、著者の発案による多くの図解が効果的に使われており、読者の理解を助けていることも特筆される。

とはいえ、本論文にも弱点がないわけではない。

第一に、理論面においては、例えば領袖と追従者の間に関する、本人—代理人関係の双方向性などの斬新な提起について、もう少し詳しく、事例に即した説明を行えばさらに良かったかと惜まれる。また、国民党との比較は行われているものの、同じ権威主義体制の国家における派閥との比較の視角が十分だとは言えない。無論、時間や資料の制約があることは理解できるが、もし他の一党支配体制との比較分析が行われていれば、中国共産党の派閥の特徴がより鮮明になったことであろう。

それに関連して、第二に、派閥の理論化に熱心なあまり、中国の政治風土を加味した派閥の特徴についての議論が必ずしも十分ではない。たとえば、中国社会の濃密な人間関係を表す言葉に「関係 (guanxi)」があるが、それは他国において派閥が形成される際の縁故と大きな差異はないと本論文は言い切っている。しかし果たしてそう断言できるのかという問いを含め、中国の政治文化と派閥の関係についてはまだ探索されるべき問題が残されているのではないかという印象が残る。

しかし、現代中国の派閥研究にとっての一里塚とも言うべき本論文の貢献は、極めて重要なものであり、ここに記した弱点は本論文の価値を大きく損なうものではない。以上から、本論文は、その筆者が自立した研究者としての高度な研究能力を有することを示すものであることはもとより、学界の発展に大きく貢献する特に優秀な論文であり、本論文は博士(法学)の学位を授与するにふさわしいと判定する。